

日本占領下の北京における日本語教育

— 体験者へのインタビュー —

川上尚恵

1. はじめに

近年、近代史・現代史研究においてインタビュー調査が盛んに行われるようになってきている。これまでの「歴史」研究では、政策文書や専門書に残っている記述、つまり文献史料によって当時の状況を判断する方法が主流であり、一般の人々の感情や生活に関する記述はほとんど存在しなかった。しかし、今日ではインタビュー調査によって、個人的な体験を歴史の中に位置づけ、当時の人々の生活や体験を明らかにするという方法がとられるようになってきた。このような流れを受けて、戦時下・占領下の日本語教育史研究においても、インタビュー調査に目が向けられはじめている。しかし、その研究蓄積はまだ十分とはいえず、引き続き様々な地域の様々な対象へのインタビュー調査が必要であるといえるだろう。

本稿は、日本占領下の北京での生活を体験した那啓賢さんへのインタビューを収録したものである。今回のインタビューの目的は、占領下での日本語学習体験者から、日本語教育の実際について聞く、ということにあった。そのため、小学校と中学校での日本語学習に関することを中心として、インタビューした。しかし、日本語教育の実際を知るためには、学習やカリキュラムについてだけではなく、社会状況も加味しなければ当時の日本語教育の本質や社会的役割にまで迫ることはできないと考え、占領下の北京の状況についてもいろいろと聞いた。

2. インタビュー調査の概要

被調査者は、中国北京市在住の那啓賢さんである。那さんは、北京市郊外の香山で満族の一家に生まれ、幼い時から北京で暮らし、10歳から18歳までを日本占

川上尚恵

領下の北京で過ごした。現在、77歳である。¹インタビューは、2004年6月11日に、北京にある那さんの自宅で行った。所要時間は、約1時間半である。インタビューでは、調査者が予め決まった質問を被調査者へ質問する形式ではなく、被調査者が人生を時系列に沿った形で自由に話すという形をとった。それには、日本占領当時のことだけではなく、被調査者のライフヒストリーの中で日本占領をどのように語るのかを明らかにしたかったという理由がある。現在那さんは日本語をほとんど話せないため、インタビューは中国語で行った。その際、調査者の中国語も十分ではなかったので通訳を介した。インタビューには、那さんの夫人である周楡(韞)華さんも同席した。

以下では、インタビューを内容によって項目別に記し、必要がある場合には解説を適宜添え、最後に筆者のコメントを述べる。なお、通訳や意味の確認のための会話は省略してある。

3. インタビュー

3-1. 小学校での日本語学習

那啓賢(以下那)：最初にちょっと自己紹介をします。私は1928年の7月に生まれました。今年76歳になります。干支でいえば辰年生まれにあたります。辰は中国のシンボルですね。1935年に小学校へ入りました。中国の小学校は6年制なので、中学校、高校で6年間ということになりますね。そして、1942年に中学校へ入りました。小学校は北京の北魏小学校でした。

川上尚恵(以下川)：この小学校は今もありますか。

那：いいえ。もうありません。中学校は北京の第三中学校です。これは今もあります。中学校3年間、高校3年間です。

川：高校も同じですか。

那：同じ第三です。日本軍に(北京が)占領されたのは、1937年の七七事変(盧溝

¹ 苗字の「那」というのは、西太后の一族であることを示しているようであるが、那さんの父親が17歳の時にすでに亡くなっていることもあり、一族のことについては祖父母の名前もよく知らないとのことである。戦後、1949年に解放軍に入り、北京を離れ解放地域へ行き、政府機関や軍の機関で勤めた。定年前には軍事科学院で政治が専門の研究員をしていた。1988年に61歳で退職したあとは、趣味である書や絵を描いたり、教えたりしている。詳しくは付記の年表を参照。

橋事件)から1945年までの8年間でした。ちょうど私が小学校の2年生の時でした。そして、4年生から日本語を習い始めました。

川: では、小学校では3年生までは日本語を勉強したことはなかったんですね。

那: はい。日本軍が(北京に)入ったばかりの頃は、まだ日本語の教育は始まっていませんでした。1939年になってもまだ始まらず、1940年から本格的に始まりました。私は小学校4年生から6年生まで3年間勉強して、中学校では1945年までの3年間勉強しました。ですから、日本語を6年間勉強したことになります。6年といえば、大学も卒業できるくらいの時間ですよ。でも、今では全然話せません。6年間という時間は短くないんですけどね。でも、当時北平(北京)の小学校では、外国語の授業がありませんでした。今は小学校レベルから英語教育がありますが、その頃はその時に日本語を勉強したのが、はじめての外国語の勉強でした。中学校では、英語の勉強が始まって、英語と日本語の2つの外国語を学びました。

川: 英語と日本語のどちらかを選択することもできましたか。

那: いいえ。英語と日本語を両方勉強しなければなりませんでした。

川: 時間数はどちらの方が多かったですか。

那: 大体同じです。

川: どのような勉強をしましたか。

那: 小学校と中学校を分けてお話しましょう。まず小学校ですが、(日本軍が北京へ入る前と後の)2つの段階があります。私が小学校2年生の時に、日本軍が東北地方を占領した後、北京へ入ってきました。そのとき、校長先生は「日本軍は中国を占領しようとしています。中国はもう終わりかもしれません。」と、泣きながら小学生の私たちに話しました。そのとき私はまだ8歳ぐらいでした。4年生から日本語の勉強が始まって、最初の先生は女の先生でした。しかし、いたずら好きな子供に手を焼いていました。

川: その先生の名前を覚えていらっしゃいますか。

那: 女の先生の名前はもう忘れてしまったのですが、次にきた男の先生は「渡辺」という先生でした。5、6年生の時は渡辺先生に教えてもらいました。40代ぐらいの男の先生でした。日本人らしいひげがあって、着物を着て下駄を履いていました。とても厳しくて、笑う顔を見たことはありませんでした。でも、みんなは怖がってはいませんでした。

川上尚恵

女の先生の時は、授業中に学生が騒いで、全然授業になりませんでした。最初は、ひらがなを書く練習があつて、日本語の歌も習いました。「はるがきた はるがきた 野にもきた」。² 簡単な歌から始まって、授業の時は厳しかったです。まず起立して、「先生おはようございます。」(日本語)といって御辞儀をしました。しかし、中国の学生は、「先生」という発音を「孫子(スンズ)」と発音して、「おはようございます」という発音を「狗咬你媽死(ゴウヤオニイマス)」と発音して、「孫子、狗咬你媽死(お孫さん、あなたの母は犬にかみ殺されました)」と言っていました。それは、子供にとっての一つの対抗手段でした。女の先生は、子供を指導できずにやめてしまいました。その後は渡辺先生が教えました。

川：その女の先生は若かったんですか。

那：はい。また、その当時は日本語のできる中国人は少なかったのも、先生はみんな日本人でした。渡辺先生は40代で少し年が上で、とても厳しかったのですが、学生は先生が黒板に向かって字を書いている時に、「わんわん」と言ったりもしました。そうすると、渡辺先生は黒板消しやチョークを投げてきました。でも、子供は素早いので、当りはしませんでした。私たちはたくさんのはたきをししました。試験の時には、カンニングもしました。

川：中国人の先生に怒られませんでしたか。

那：みんな下をむいてこそこそやっていたので、先生には気づかれませんでした。

川：他の教科は中国人の先生が教えていましたか。

那：国語など、他の教科は全部中国人の先生でした。他の先生はそのまま授業をしていました。日本語の時間数は、国語、数学の時間と同じでした。³ 一日の中で時間数も多く、勉強した期間も決して短くはないのですが、効果はあまりなかったです。

川：それは、先生が悪かったとか、教科書が悪かったとか。それとも勉強しなくなっただけでしょうか。

那：やはり勉強しなくなかったということが大きいです。抵抗がありましたね。日本が侵略のために中国人を同化しようとしていて、そのために日本語を教えていると

² 日本語で歌った。

³ 1938年8月より華北の全ての小中学校で日本語の授業が義務付けられるようになった。初級小学校3、4年生には週に1時間、高級小学校1、2年生には週に1時間半の日本語の授業が課せられた。また、中学校では週に3時間の授業があった(文部省図書局 1939)。

思っていました。これは私自身の考えですが。小学校では、ひらがなやカタカナは読めましたが、文法などは一切勉強しませんでした。教科書もとても簡単でした。絵が多くて、字はあまりなかったです。

川：教科書の名前などは覚えていますか。

那：そのまま、「日語課本(日本語教科書)」という名前でした。日本の童話が多かったです。例えば、豚は数を数えていたが自分を数えるのを忘れていたとか、教科書はとても易しかったです。小学校の印象としては、そんなにありません。3年生までは社会の治安もよくて、物価も安定していました。でも、1940年12月8日⁴に日本軍が真珠湾を攻撃して、東南アジアにまで侵略の範囲を広げはじめました。その頃から日本は「大東亜共栄圏」という宣伝を行いはじめ、政治的な活動が多くなってきました。「慶祝〇〇戦勝了」「〇〇占領」という言葉を掲げて、それを祝う活動やデモがありました。

川：このような活動に参加されましたか。

那：小学生が参加する事は少なかったです。しかし、学校ではたくさんの宣伝用のちらしが貼ってありました。「慶祝南京戦領」(南京占領を祝う)や「香港戦領」(香港占領)などのちらしや、フィリピン、東南アジアのものも貼ってありました。

3-2. 中学校での日本語学習

那：その後、中学校に入ると、中国人の先生が日本語を教えるようになりました。最初の先生には、あまり長い期間教わりませんでした。次の先生は楊歳初という先生でした。

川：男の先生ですか。女の先生ですか。

那：男の先生です。日本の大学で科学を勉強して、卒業した後に戻ってきて日本語を教えていました。

川：北京の人でしたか。

那：いいえ。田舎の人でした。詳しくはわかりませんが、方言がありました。当時は、(日本軍が入ってきて)何年かたっていましたから、日本語ができる中国人というものがある程度育っていました。その頃になると、日本人は現場ではなく、その後ろで監督していました。学校には、日本人は1人だけでした。そして、日本人

⁴ 正確には、真珠湾攻撃は1941年12月7日(日本時間8日)である。

川上尚恵

の監学も学校にやって来ました。授業はしないのですが、常に学校の中にいました。中学校では、日本語を3年間勉強しました。

楊先生と私たち学生は仲が良かったです。楊先生は、学生に対してとても親切だったし、授業でいたずらをしてそんなに叱りませんでした。テストでカンニングをしても、見ないふりをしていました。だから、学生と仲が良かったんです。もし学生と良い関係を築いていないと、日本人との味方だと思われるということがあったからでしょう。クラスの中では、日本語が上達した人が1人か2人ほどしかいませんでした。

川：そのような人たちは、日本語の上達を目指して熱心に勉強していたんですか。

那：そのような人たちの多くは、家族の誰かが日本人とつながりがありました。だから、必要性があったり、家の中に日本語が出来る人がいたりして、上達したんですね。しかし、クラスメートたちは、そのような人にあまりいい感情を持っていませんでした。日本人の味方になってしまったと思っていたんですね。彼らは日本人の言いなりになるのではないかと考えていました。

川：中学の時は、どのような教科書で何時間くらい日本語を勉強しましたか。

那：週に4、5回くらい日本語の授業があって、英語と同じ時間数でした。少なくともなかったと思います。教材は全部楊先生が集めたものを使っていました。臨時的なものだったと思います。

川：どのような内容だったか覚えていますか。

那：文法を勉強したんですが、今では内容は忘れてしまいました。全然覚えようとしませんでしたから。中学校から文法の勉強が始まりましたね・・・確か、助動詞などの文法がありました。

川：その他の授業はどうでしたか。

那：英語や数学がありました。北京第三中学校は、北京では成績のいい学校でした。しかし、他の科目より日本語の成績は悪かったです。英語ほどよくありませんでした。

川：日本人が来て、戦争について話したことや講義をしたことなどはありましたか。

那：いいえ。日本人は多くの人の前で授業をすることはありませんでした。

川：出世のために日本語を学ぶ人もいましたか。

那：はい。いました。しかし、知り合いにはいませんでした。私の父は日本語も話せず、日本人の友達もいなかったのも、全然出世できませんでした。ずっと、最も

立場の低い課員でした。

日本人は監学として学校全体を監督していて、地理や歴史の教科書の内容をチェックしていました。でも、(中国人の)先生たちは授業の時に、ひそかに教科書以外のことも教えていました。むかしの日本との戦争のことなどです。それは禁止されていたので、教科書の中にはありませんでした。⁵ 今はその先生たちはみな亡くなってしまいました。しかし、おひとりだけ現在も首都師範大学にいらっしゃいます。彼は燕京大学を卒業していましたね。その方ひとりしか残っていません。

川: その方は何を教えていたんですか。

那: 彼は歴史と英語の先生でした。中学校の時の先生で、当時大学を卒業したばかりで一番若い先生でした。今年で88歳になります。現在、大学で博士課程の学生を教えています。

3-3. 日本占領下の北京

那: 七七事変(盧溝橋事件)はご存知ですね。北京でも銃の音なども聞こえました。事変の何日か後から、国民党の29軍が北京を守るようになりました。その軍隊の隊長は宋哲元でした。彼らは灰色の軍服を着ていて、銃ではなくて刀(包丁のような大きいもの)を持っていたので、「大刀隊」と呼ばれていました。銃はなかったの、その刀だけを持っていました。日本軍はこの29軍を怖がっていました。七七事変以降、国民党の宣伝で日本との戦いのことはよく聞きました。七七事変についてはお詳しいですか。29軍と日本軍の両方から多くの死者がでました。29軍の副軍長(佟麟閣)も亡くなりました。その時亡くなった人の名前にちなんで、現在の北京には、「佟麟閣、趙登禹通り」⁶ という通りがあります。⁷

周楡華: 少し日本人の感情にも配慮して話をしたら?

川: いいえ、気にしないで下さい。私は那さんの話を聞くために来ていますから、率直に話していただいて構いません。

⁵ 臨時政府教育部は、排日的な内容を教科書から排除するために新教科書を編纂し、それを国定教科書として使用するよう訓示した(藤本1939)。

⁶ 現在の北京市通州区佟麟閣大街と北京市西城区趙登禹路のこと。

⁷ 第二十九軍副軍長佟麟閣、第百三十二師団長趙登禹。共に28日の支那駐屯軍との戦闘で死亡した(白井2000)。

川上尚恵

那：そうですね。私もそう思って話しています。でも日本人の若者は戦争についてよく知らないと思うので、1937年の七七事変についてきちんと説明したいと思います。まず7月26日に日本軍が29軍に北京から撤退するようにと最後通牒を出しました。その時は、北京で増員しました。10万人ほど増やして、戦争の準備をしました。28日に、宋哲元が蔣介石の命令にしたがって、軍隊を撤収しました。その時、私は新街口に住んでいました。そこは、宋哲元の隊が駐屯していた場所と近かったので、その隊の様子を毎日見ていました。しかし、28日からは隊を見ることはなかったです。28日の夜には、全て撤退してなくなってしまったのです。

川：那さんは、その時もずっと北京にお住まいだったのですか。

那：その後北京を離れたことはありますが、その時まではずっと住んでいました。その日の午後、軍隊が入ってきました。雨が降っていました。29日の午後のことでした。日本軍が西直門から入ってきました。たくさんの軍隊が入ってきて、中には衛兵や騎兵隊もいました。武器をたくさん持っていて、兵隊たちはみな革のブーツを履いていました。その時、私はまだ子供だったので、道に出て見に行きました。心の中では怖かったのですが、見てみたい気持ちもありました。隅のところでこっそり見ていました。その時、北京の店はみな閉めていました。しかし、日本軍の規律は悪くありませんでした。人を殺したりすることもありませんでした。雨が降っていましたが、店に入ることができなかったため、みんな店の外で弁当箱を持って食べていました。その時は、店にも人の家にも押し入ることはありませんでした。みんな外で食べていました。北京の状況は、南京など他の地域とは全然違うかもしれません。北京は古くからある街ですし、29日は撤収したばかりだったので急ぐ事なく、平和的に入ってきたのだと思います。

私はそれから小学校4年生で日本語を勉強しはじめました。日本軍が入ってからは、店や学校はみな元通りに始まりました。しかし、大学や政府機関などの官僚たちはみな北京を離れ、他の場所へ移りました。清華大学、北京大学、北京師範大学などは昆明へ移り、北京大学と清華大学は連合大学を作って、南の方へ行きました。しかし、アメリカ系の燕京大学や、輔仁大学、中国大学はそのままだ北京にありました。私の家族はサラリーマンでしたから、北京を離れるお金もありませんでした。大部分の人々は北京に残っていました。

淪陷区(占領地)になって変わったことと言えば、昔は学校に孫文の写真(印

刷された写真)を飾ってあって、毎週あった会議がはじまる前には必ずお辞儀をしなければなりません。しかし、日本軍が入ってきた後は、孫文の写真はなくなり、孔子の写真に変わりました。孔子は日本と中国が両方とも受け入れることのできる人でしたから。孔子は中国で最も古い教育者です。毎日写真に向かって御辞儀をしました。

川: それは、朝の登校時ですか。

那: はい。学校に入ったらすぐお辞儀をしました。孫文の写真から孔子の写真に変わったことが、一つの変化でした。⁸

また、その当時は華北地域にいる日本人が少なかったので、ほとんど中国人を通じて人々をコントロールしました。特にアメリカと戦争を始めてからは、日本軍は南の地方に多くいかされましたから。軍隊の人数が少なくなりましたが、軍隊に支援物資を持って行かせたので、北京の生活レベルはだんだんと下がっていきました。生活はどんどん苦しくなっていきました。そこで、分配制を作りました。中国人は米を食べられず、混合面(いろいろな粉類を混ぜたもの)などの悪い粉しか食べられませんでした。1940年以降は生活が厳しくなり、だんだん状況が悪くなっていきました。また、中国人は家の中にある銅製や鉄製などの金属類を出さなければなりません。このようなことから、中国人の抵抗の意識がだんだん強くなっていきました。食べる物がなく、高価な物は日本人に出さなければいけなかったからです。

周韞華: もし、主食類を買いたかったら、前日から列を作って並ばなければいけません。その粉も本当の粉ではなく、どうもろこしなどが混ぜてありました。

那: その粉は苦味があって、食べると喉が痛くなってしまいました。量を増やすために、中には木の皮を粉にしたものが入っていました。伝染病なども出てきて、衛生状態も悪くなっていきました。日本軍が化学兵器の実験をしたりしたので、東北や華北でコレラやペストなどの伝染病が流行ったんです。だれかが発熱したりすると、日本軍がやって来てその人を隔離しました。まだ死んでいなくても、連れて行かれて焼かれた人もいました。私の家でも、1人発熱したものがいたので、家から出られなくなってしまいました。正確には、私の家のものではなく、同じ胡同(横丁)に住んでいる人だったのですが、それでも胡同中の人が外出禁止に

⁸ 中学校では、写真への御辞儀はなかったそうである。

川上尚恵

なりました。私は学校があったので、木を登って屋根を伝ってこっそり出て行きました。その後何日間は家に帰りませんでした。

川： 那さんの家族は大丈夫でしたか。

那： はい。家族の者には変わりありませんでした。何日後かに、伝染病ではないと分かかったので、外出禁止が解かれました。このようなことは 1940 年以降のことですね

当時、中国人を逮捕したり、労働者を強制的に連れて行くなどという事件がいろいろとありました。私の2歳年上の母方の従兄弟も、1940年に失踪したんです。どこへ行ったのか今でもわかりませんが、たぶん労働力として日本に連れて行かれたのでしょう。当時はたくさんの中国人が連れていかれました。私の母の姉の子供でした。16歳ぐらいだったと思います。よく日本の軍隊が道端で中国人を逮捕する光景を見ました。国民党か共産党かは関係なく、常に誰かを逮捕していました。生活レベルが低くなった上に、人をよく逮捕するので、日本に対する抵抗が強くなっていきました。

第三中学校は今でもありますが、その運動場の西にはビルのような建物があって、そこに日本軍が泊まっていた。学生は授業が終わった後、その運動場でボールを投げたりして遊んでいたんですが、暗くなってくるとそのビルの窓に石を投げたりしていました。私も参加していて、時々何人かの学生はガラスを割っていました。外からみると、バスケットボールをしているように見えるんです。ある日、隙をうかがって石をなげていました。すると、日本軍が突然隣から学校に入って来て、学校の門を閉めました。そして、校長先生達を呼んで、石を投げた者を逮捕しようとした。しかし、校長先生と日本語の先生が日本軍と交渉した結果、逮捕されることはありませんでした。校長先生が責任を持って調べるとのことと、2度とこのような事を起さないということを約束したようです。

川： その時学生は何人くらい参加していたんですか。

那： 何十人くらいですかね。その時、私は中学校2年生で、1943年か44年だったと思います。みんな、中国人を日本人から守ってくれた校長先生は素晴らしいと思いました。

川： その時の日本語の先生は楊先生でしたか。

那： はい。楊先生は学生とだけではなく、他の先生との関係も良かったです。そんなに管理されていたということがなかったので、学生からの印象は良かったです。

もし厳しかったら学生は抵抗したでしょうね。ですから、そういう状況で日本語が上手くなるわけではないですね。

川：日本軍が北京へ侵入するまでは、日本についてどのような考えをお持ちでしたか。

那：北京は東北地方と近いので、東北占領以降、日本に関することをいろいろと聞くようになりました。それ以前も、歴史上のこと、例えば台湾の問題や八国連合軍(義和団事件)の時のことで、日本のことは知っていました。八国連合軍の時は、私の母方の祖母などはみな北京にいましたので、その時の話をよく聞きました。だから、帝国主義という印象が強かったですね。八国連合軍が北京に入ってきた時、北京の状況は悲惨で、円明園も焼かれました。当時、日本人が祖母の住んでいた近くにいたそうです。多くの小さい女の子は、日本人を恐れて、顔を黒くして、みすぼらしい服を着ていました。家の中にいい物はあまりありませんでしたが、時計などがあれば奪われました。話を聞いた中で一番印象に残っているのが、祖母の家の庭にたくさんの柿の木があったのですが、日本人はその実をまだ熟していない時に食べたので、一口食べたとなんにまづくてそれを投げ捨ててしまったということです。多くの人々が次々と北京から逃げ出し、日本軍が自分の隣の家に入るのを見てすぐ逃げ出したという人もいたそうです。その時は、西太后も西安へ逃げ出しました。そのような事実を聞いて、民族、愛国精神が高まる思いがしました。

川：那さんは、占領当時街中では多くの日本人を見ていたんですか。

那：7月7日以前はあまり見ませんでした。しかし、29軍が来てからは隣でしたからよく見かけました。新街口や航空胡同などでよく見ました。私の弟や妹は、その胡同を避けていました。そこには、どこかの司令部が入っていました。

川：街中で日本語はよく使われていましたか。

那：いいえ。だから、日本語の成績が悪くても、結局使い道がなかったから、関係なかったんです。接触した日本人も少なかったですし。でも、中国に移住してきた日本人は多かったです。私の家の近くにも日本人家族がいて、当時同じくらいの年だった子と遊んだ事もあります。ですから、小学校くらいのときは、日本人と中国人の関係はそんなに悪くありませんでした。でも、次第に悪くなっていきました。その後、隣の家族はそこから引っ越していきました。

川上尚恵

3-4. 日本の占領と日本語学習に対する思い

川：それでは最後に、那さんが現在、当時の日本軍や日本語教育についてどう思っているかお聞かせいただけますか。

那：私は、当時の状況での日本語教育は失敗だったといえると思います。占領する側とされる側、統治する側とされる側という立場では、現在の友好関係とは全然違います。強制的に勉強させられるということが、いい結果につながるわけではありません。その後の人生で学んだことから、「要你学(勉強させる)」と「你要学(勉強したい)」ということは、結果が全然違うと思います。大学でも、その中でも自分の興味のある科目では、成績がいいでしょう。でも、興味のない科目では成績がよくありません。私にとって、絵や書道はとても興味のあることです。だから、夜遅くなっても、休日がなくなっても、勉強しに行きました。つらいこととも思いませんでした。しかし、自分の興味がないことに対しては、あまり努力しませんでした。みんなそうでしょう。私は自分の経験からそう思います。学校でも、選択科目の方が成績がいいでしょう。ですから、現在の教育でも良くないのは、勉強させることが多いことです。自分の興味があることをする時間がありません。多くの人が、「なぜ那さんのお孫さんは絵や書をしないのですか。」といいますが、みないい大学に入るために勉強で忙しく、そんなことをする時間がないのです。私は42年から48年の間、時間を作って絵や書を学びました。絵や書が大変好きでしたから。夏休みや冬休みも休まず、友達などは授業が終わると映画を見に行ったりしていましたが、私は家に帰って絵や書の宿題をしていました。また、学校の宿題もしなければなりませんから、忙しかったです。ですから、日本語の授業や勉強は私の日常生活の中に入っていませんでした。試験の時は、カンニングですませていましたしね。だから、いい結果を何も残さなかったのは当然でしょう。

川：今日はたくさんのお話をきかせていただき、ありがとうございました。

4. 最後に

今回のインタビューでは、資料や文書などでは知ることのできない、体験者の生の声を聞くことができた。もちろん、インタビュー調査という手法に、問題がないわけ

ではない。内容が被調査者の個人的体験に留まり一般化できないということや、被調査者の記憶の曖昧さや記憶の修正などというバイアスも存在する。しかし、インタビュー調査を文献史料とあわせてみることによって、このようなバイアスはある程度克服できると考える。また、インタビューで実際の体験に触れることによって、研究者の研究に対する意識へも何らかの影響があるだろう。本稿で取りあげたようなインタビュー調査の結果と資料調査をどのように組み合わせるのか、ということは今後の重要な課題である。

さて、今回那さんに話していただいた中には、政策上の決定と違っている部分もあったので、それらの点について触れておきたい。まず、日本語学習開始の時期である。日本語の授業は政策上、全ての小学校の3年生から導入されていたことになっているが、那さんによると4年生からであったという。また、授業時数についても、小学校では週1時間から1時間半、中学校では週3時間となっているが、那さんは小学校では国語や数学と同じぐらいの時数、⁹ 中学校では週4、5時間と記憶している。この相違の原因は、日本語の学習開始時期や授業時数が絶対的なものではなく、各学校の状況に合わせて変更することが認められていたことにあるのではないだろうか。1938年に修正公布された「小学教学科目及毎週教学分数表」の中では、日本語の授業時数のみが()で示されている(興亜院華北連絡部 1941)。これは、授業時数の変更が可能であるという表示であると思われる。また表の説明の中には、各学年の日本語の授業数は地方状況に鑑み、主管の教育行政機関の許可があれば免除することもできる、との記述がある。授業時数については、那さんが通った北魏小学校と北京第三中学校の場合は、免除ではなく増加であるが、地方状況に合わせて変動的に日本語教育が行われていたと考えることはできるだろう。¹⁰

それから、日本語を積極的に勉強することが日本への肩入れと見られていたということにも注目したい。もちろん、占領と被占領という関係を考えれば、当然のことではあるが、それが実際にどのような行動に表れていたのかを知ることができた。例えば、学習者側であれば、授業中騒いだり、カンニングをしたり、悪い成績を取ったりすることで反日の感情を示し、反対に成績がよい学習者は親日派だと思われる。ま

⁹ 1938年に修正公布された「小学教学科目及毎週教学分数表」の中では、小学校4年生から6年生では、国語の授業が週450分、算数(筆算・珠算)週210分となっている。

¹⁰ 天津の日本語の授業数は、小学校で週60分から150分、中学校では週4時間から6時間と報告されており、北京以外の学校でも授業時数が増やされた例を見ることができる(天津特別市公署教育局 1943)。

川上尚恵

た、那さんが楊先生は意識的に学生や他の先生との関係を良好に維持していたと感じていたように、教える側である教師もそのような感情に配慮していたと考えられる。更に、占領の開始時には比較的平和的だった日本軍の行動が次第にエスカレートし、社会状況も悪化していったことが、更に反日感情を煽っていた。このことから、約8年間に渡る占領の初期と後期とでは、学習者の日本観、日本語学習観にも変化があったのではないかと予想できる。一方、日本語の実際の使用状況については、那さんは街中で日本語が使われている光景を目にすることはあまりなかったようである。しかし、日本語ができると出世できるという風潮があったことから、日本人と関係する場所では、日本語の需要があったのではないかと考えられる。その需要は単にコミュニケーション上の必要性というだけでなく、日本語学習＝日本へのすりよりの図式が成り立っていたらという事は想像に難くない。

また、那さんの「勉強させる(要你学)」と「勉強したい(你要学)」という言葉がとても印象深かった。占領下の義務教育での日本語教育の導入は、学習者の学習動機が存在せず、いわば強制的に学習させられたという側面が強いといえる。そのため、当時の日本語教育に対する那さんの評価は、「失敗」という言葉で表されている。実際の学習者がそれを「失敗」と表現していることは、文献史料などからでは見えてこない側面である。しかし、これはあくまでも那さん個人の評価であり、現在から当時を振り返ってみた場合の評価である。それをもって当時の日本語教育全体を「失敗」と速断することはできないであろう。ただ、それが主観的なものであり、現在からの評価であるということを考慮にいれつつ、文献史料研究での評価を合わせてみることで、文献史料研究からは生まれてこない新しい視点が生まれるのではないかと考える。

現在、那さんは北京で長年続けてきた絵や書道を教えている。しかし、数年前に目を悪くし、体がうまくついていかないこともあるようだ。那さんのみならず、日本占領の体験者はすでに80代、90代になっており、その貴重な体験が埋もれたまま消えていきつつある。今後も続けてインタビュー調査を行い、その体験を掘り起こすよう努めたい。

最後に、快くインタビューに答えていただいた那啓賢さん、同席していただいた周楡華さん、通訳者の王瑩さん、名古屋大学大学院国際言語文化研究科の顧那さんに感謝の意をささげたい。

参考文献

- 臼井勝美(2000)『新版 日中戦争』中央公論新社
- 川上尚恵(2004)「占領下の中国華北地方における日本語教育—日本人日本語教師と中国人日本語教師の連携をめぐる—」『言葉と文化』第5号
- (2005)「占領下の中国華北地方における日本語教員養成機関の役割—省・特別師範学校卒業者の進路と社会での日本語需要から—」『日本語教育』第125号
- 興亜院華北連絡部(1941)『北支に於ける文教の現状』興亜院華北連絡部天津特別市公署教育局(1943)「天津市に於ける日本語教育の沿革及現況の概要」『華北日本語』第2巻11号
- 藤本万治(1939)「北支に於ける文化工作の状況四」『文部時報』第645号

附:那啓賢年表

年	月	年齢 (中国方式)	出来事	歴史的イベント
1928年	7月	1才	5人兄弟の長男として生れる。両親、弟1人、妹3人の家族。	
1935年		8才	北京市立北魏小学校へ入学する。	
1937年		10才		盧溝橋事件が起こり、日本軍が北京に侵入する。
1940年		13才	日本語学習が開始される。	
1942年		15才	北京市立第三中学校へ入学する。絵や書道の勉強を始める。	
1945年		18才		終戦を迎え、日本軍が撤退する。
1949年	3月	22才	河北大学(現在の人民大学)に入学する。	中華人民共和国が成立する。
1949年	10月	22才	解放軍に入隊し、広州へ向かう。	
1954年		27才	結婚する。	
1965年		38才	広州から広西へ移る。	
1970年		43才	広西から広州へ戻る。	
			軍事科学院で研究員として政治を研究する。	
1988年		61才	退職し、絵や書道を教え始める。	
2004年		77才	現在	